

矢吹町文化財報告書第13集

上宮崎C遺跡調査報告書

2009年

矢吹町教育委員会

上宮崎 C 遺跡

序 文

わが矢吹町は、中通り地方の南部、白河市と郡山市のほぼ中央に位置し、人口 18,700 人の「さわやかな田園都市・矢吹」をキャッチ・フレーズにした自然環境豊かな町であります。旧石器時代から平安時代に至る遺跡も町のいたるところに見られ、歴史と伝統の町として連綿と発達してまいりました。

今回調査した上宮崎 C 遺跡は、福島空港・あぶくま南道路（トライアングルハイウェイ）に隣接しており、近隣には上宮崎 A 遺跡、上宮崎 B 遺跡、小又遺跡、白山遺跡が点在しております。大規模開発予定のため、試掘調査を行った結果竪穴住居跡が確認され、その一部を記録保存し、ここにその報告書を刊行することになりました。本書が文化財保護、学術研究の資料の一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な協力をいただいた地権者をはじめ、多方面でご協力をいただいた関係者の皆様に感謝するとともに、現場において調査に携わった皆様方のご尽力に心から敬意を表します。

平成 21 年 3 月

福島県矢吹町教育委員会

教育長 栗 林 正 樹

緒 言

- 1 本報告書は、平成 20 年度に矢吹町教育委員会が実施した上宮崎 C 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 上宮崎 C 遺跡は、福島県西白河郡矢吹町諏訪の前 115 番地 1 に所在し、福島県遺跡地図番号は 46600136 番である。
- 3 本調査は、開発に伴い、鹿島リースより委託を受けて矢吹町教育委員会が実施したものである。
- 4 調査体制は次のとおりである。

調査指導 荒木 隆（福島県教育庁）

調査主体者 矢吹町教育委員会 教育長 栗林 正樹

調査担当者 矢吹町教育委員会生涯学習課 主幹 円谷 政雄

調 査 員 佐々木 慎一（財団法人福島県文化振興事業団）

事 務 局 矢吹町教育委員会生涯学習課 課 長 水戸 光男

主 査 大野 喜敬

主 査 角田 良次

副主査 遠藤 舞

作業協力 赤沢 勝弘 有賀美枝子 伊勢野秀男 佐久間セツ 熊田ヨシノ

蛭田吉之助 宮本三八子 横田 幸子

- 5 掲載遺物の選定は、国土館大学文学部教授戸田有二が行い、実測は、国土館大学学生今井昭俊が行った。
- 6 本書は、佐々木・角田が分担執筆し、佐々木が編集した。
- 7 本書に収録した遺物及びその他の資料は、矢吹町教育委員会において保管している。

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を示す方位を示した。
- (2) 標 高 水準点を基にした海拔高度で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字「L」とローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積層はアルファベット小文字「ℓ」と算用数字を組み合わせで表記した。
- (5) ケ バ 遺構内の傾斜面はケバで表現した。
- (6) 線の表現 破線は推定範囲、一点鎖線は貼床範囲、二点鎖線は踏み締まりを示す。
- (7) 網 掛 け 挿図中の網掛けの用例は、同図中に表示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土 器 断 面 土師質土器の断面は、白抜きとした。
- (2) 縮 尺 各挿図中の縮尺を示した。
- (3) 網 か け 挿図中の網掛けの用例は、黒色処理を示し、それ以外は同図中に表示した。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

矢吹町 Y B	上宮崎C遺跡 K M Z ・ C	遺構以外堆積土 L
遺構内堆積土 ℓ	竪穴住居跡 S I	土坑 S K 小穴 P
グリッド G		

4 参考・引用文献は執筆者の敬称を略し、巻末に収めた。

目 次

第1章 調査に至る経緯と環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第3節 調査方法	4
第4節 遺跡の環境	5
1 地理的環境 (5)	2 歴史的環境 (6)

第2章 遺構と遺物

第1節 基本土層	11
第2節 竪穴住居跡	13
第3節 土 坑	19

第3章 ま と め	20
-----------------	----

挿図・表 目 次

〔挿図〕

図1 矢吹町位置図	1	図6 1号住居跡(1)	14
図2 調査区	3	図7 1号住居跡(2)	15
図3 矢吹町地質図	5	図8 1号住居跡出土遺物	17
図4 周辺の遺跡	8	図9 1号土坑	19
図5 遺構配置図、基本土層図	12		

〔表〕

表1 周辺遺跡一覧	9
-----------------	---

写 真 目 次

1 調査区全景	25	5 1号住居跡細部(1)	27
2 基本層位、遺構検出	25	6 1号住居跡細部(2)	27
3 1号住居跡全景	26	7 1号土坑	28
4 1号住居跡炭化材検出状況	26	8 1号住居跡出土遺物	28

第1章 調査に至る経緯と環境

第1節 調査に至る経緯

大規模開発予定地（以下「開発予定地」。）となっている矢吹町諏訪の前115番地1は林野庁所有の旧白河営林署矢吹種苗畑地として営まれていたところでもあります。隣接地は、福島空港・あぶくま南道路（以下「トラハイ」。）の建設に伴い調査した上宮崎A遺跡、上宮崎B遺跡、小又遺跡、下宮崎A遺跡、白山C遺跡が点在している箇所でもあります。

レンゴー株式会社は現在郡山市にある会社からの移転用地を探していたところ、矢吹町にある旧白河営林署矢吹種苗畑地が、立地的にも魅力のある場所であるため移転用地には最適と考え取得しました。

そこで町は開発担当部局の産業振興課及び文化財保護部局の教育委員会と発掘調査が必要であるかの協議を行い、また、福島県文化財課からの意見を聞いた結果、トラハイに隣接している開発予定地付近には、上宮崎A遺跡があり、上宮崎B遺跡dでは大規模な古代の集落が発見されている等多数遺跡が点在しており、この開発予定地においても同じ様な地形であり、これまで国有営林署所有であったため分布調査を行うことも難しく、地表面も改変を受けている可能性があるため地下の遺構や遺物が存在するのかを調べる必要があると判断されました。

このため、町教育委員会では緊急に財団法人福島県文化振興事業団の協力をへて、平成20年4月14日から25日の10日間で試掘調査を実施し、対象面130,000㎡中に62箇所のトレンチを掘り下げ、トレンチ一部で竪穴住居跡1棟が確認されました。

試掘調査の結果を基に、開発計画を持っているレンゴー株式会社と保存協議を行いました。工場整備計画の中で、今回確認できた遺構を現状保存するのは残念ながら困難であるため、記録保存のための発掘調査を行うこととなり、遺構、遺物を確認した場所から中心に1,200㎡を要保存範囲とし本調査を行うこととなりました。

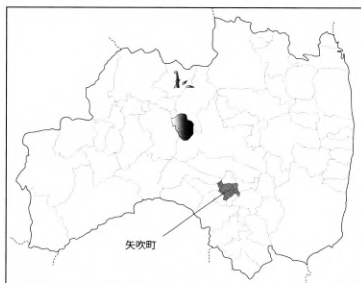


図1 矢吹町位置図

第2節 調査経過

上宮崎C遺跡は、平成20年4月14日～25日の10日間に130,000㎡を対象に62本のトレンチ(4,984㎡)を設定し試掘調査を実施した。その結果、土師器片を伴う竪穴住居跡1軒が確認され、調査対象区のほぼ中央に1,200㎡の要保存面積が確保された。

これらの結果をもとに発掘調査の日程が調整され、発掘調査は同年8月25日～9月12日までの15日間で実施された。以下に経過の概要を記述する。

8月25日；重機を使用して、調査区中央の区画用垣根を撤去した後、調査区北東側より表土の除去作業を開始する。既に表土厚は30cm～50cmを測ることが確認されていることから、表土除去作業に2日を予定した。排土については、後日撮影用の高台にすることから、調査区南側に盛り土することとした。作業員の導入は、重機稼働中であることから安全面を考慮して27日からとした。

8月26日；先の試掘調査で発見されていた竪穴住居跡を、再度検出し全容を確認した。表土除去作業が調査区の1/4程を残すのみとなったことから、発掘器材の搬入を並行して行った。

8月27日；作業員を導入。重機による部分的な表土除去作業と並行して、竪穴住居跡の周辺を優先して遺構検出作業に取りかかる。重機は表土除去および排土の整理を行った後に返却した。

8月28日～9月3日；遺構の全体像が確認され精査環境が整ったことにより、竪穴住居跡の掘込みを開始した。なお、遺構検出作業は継続し調査区全域にかけて行った。同時に遺構実測の準備を整えるために測量用基準杭打設を専門業者に依頼し実施した。基本層位図作成。

住居跡の掘込みが進むにつれ、遺構内に炭化材が多く確認され、焼失家屋であることが判明した。炭化材出土状況の分布図作成および写真撮影のための準備と並行して、住居跡床面およびカマド等の住居内施設の確認作業を行った。土層観察帯の写真撮影を行った後には実測準備を開始した。

9月4日；測量用基準杭打設完了。住居跡の土層観察帯の記録作成を行った後、土層観察帯の除去作業を実施した。

9月5日；住居跡床面の精査と並行して、カマドの精査を開始した。カマド内には多くの遺物が確認されたことから、部分的な作図を行いながら精査を行った。

9月8日；土層観察帯除去後は、炭化材の分布状況の写真撮影と分布図作成を行った。調査区内の遺構検出作業を終了し、遺構と思われる部分の精査を開始した。

9月9日；カマド精査と炭化材分布図作成を終了させた。炭化材を除去し床面精査を行い貯蔵穴・支柱穴・壁溝・鍛冶跡を確認した。

9月10日；カマドおよび住居跡内施設精査完了。住居跡床面の除去作業開始。調査区全体図作成。

9月11日；住居跡床面の除去作業終了。貼り床下施設の精査開始。

9月12日；住居跡精査終了後、1基の土坑が重複した状態で確認されたことから、精査を行い完了させ、全ての作業を終了した。

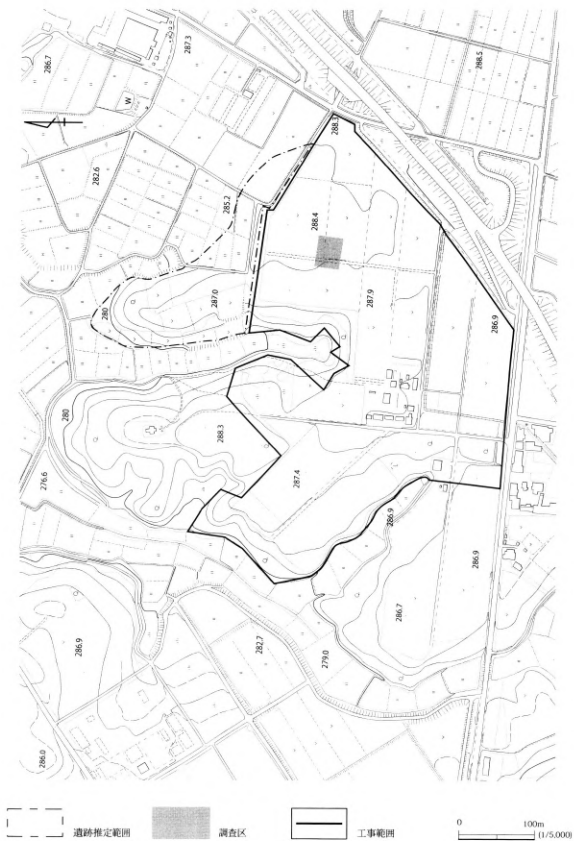


図2 調査位置図と遺跡範囲

第3節 調査方法

上宮崎C遺跡の調査区は元白河営林署矢吹第一種苗事業所が所在し、広大な面積を有した種苗圃であった所である。現況は荒地地となっている。

調査で使用する測量座標の設定にあたっては、調査区内の南西側に設定した国土座標 $X = 132.975$ 、 $Y = 46.035$ の地点を新たに南北 00、東西 00 の測量原点とし、 X を $N \cdot S$ 、 Y を $E \cdot W$ と読み替えて表すこととした。したがって、測量原点から南に 50 m、東に 60 m の位置は、 $S 50 \cdot E 60$ と表示している。

グリッドの設定にあたっては、座標の設定によってできた南北 4 m、東西 4 m の方眼を一単位とし、東西にアルファベット $A \cdot B \cdot C \cdots$ 、南北にアラビア数字 $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots$ という記号を与え、その組み合わせで表示することとした。

遺構の掘り下げに際しては、畑地の耕作土を重機で除去し、それ以下の土層の掘り下げ及び精査は人力を基本として作業を行った。遺構の掘り込みは、遺構軸を基本に 4 分割法を用い、土坑については 2 分割法を採用した。遺構内から出土した遺物については、土層観察帯の層位を基準に取り上げ、出土状況が良好な場合は、写真撮影の後、出土状況の作図を行った。

遺構調査の記録写真は調査の進捗に併せて、検出状況・土層観察帯・遺物出土状況・完掘状況の撮影を行った。使用した機材およびフィルムは、35mm カメラ・コンパクトデジタルカメラ、モノクロームフィルムである。

遺構図面は上記で表現した座標を基準とした簡易遺り方測量で 1/20 の縮尺を基本として作図し、地形図については、光波測距儀を用いて 1/200 の縮尺で作図した。

発掘調査で得られた記録・遺物資料は、財団法人福島県文化振興事業団の整理基準に準拠して整理を行い、報告者作成作業終了の後、それぞれの台帳を作成し矢吹町教育委員会で保管する予定である。

第4節 遺跡の環境

地理的環境

上宮崎C遺跡の所在する矢吹町は、福島県中通り地方の西白河郡に属し、郡内の北東部に位置している。東は石川郡玉川村、南は西白河郡中島村および石川町北は岩瀬郡鏡石町そして西の白河市・泉崎村とそれぞれ境界を接し、面積約 6,079ha の町である。

周辺の地形を概観すると、東に阿武隈川を挟んで阿武隈高地が低く連なり、西には奥羽脊梁山脈を望み。また、周辺の主要河川は、この脊梁山脈の一角を成す那須火山帯にその源を発し、河岸段丘、氾濫源を形成する阿武隈川が玉川村との境を北流している。一方、矢吹町の南側に位置する泉川は、矢吹が原の南東部の平坦地を削りながら中島村で阿武隈川に流入し、西部は天栄村の権太倉山に源を発する隈戸川が、羽鳥湖の水を集めて矢吹が原を北流し、釈迦堂川を経て須賀川地内で阿武隈川阿武隈川へと注いでいる。また、他にこれらの主要河川の支流となっている多くの小河川により流域が構成されている。ちなみに、上宮崎C遺跡はこの主な3本の河川から平均で3kmの距離を測りほぼ中心域に位置している。町域は矢吹が原と呼称される広い台地状の平地と、なだらかな丘陵地帯が大部分を占めている。全体的に低地部は少なく、丘陵部に樹枝状に入り込んだ谷地形や、

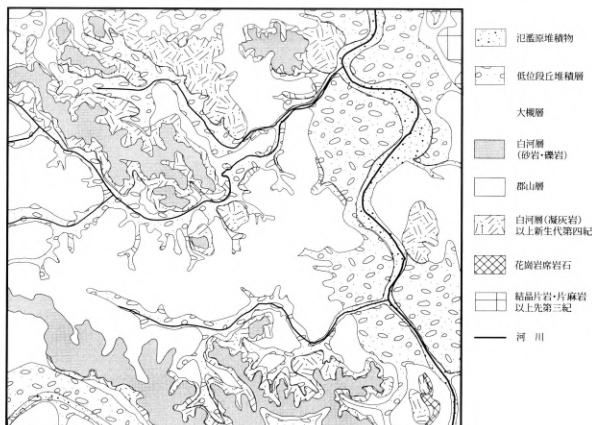


図3 矢吹町地質図

阿武隈川や隈戸川を作る段丘群と氾濫原が見られる。

丘陵地は、主に石英安山岩質溶結凝灰岩とその二次堆積物を起源とする礫岩・砂岩より構成される白川層からなる。現在は丘陵地の多くは森林となっており、裾野については、桑畑・畑地としての利用が見られる。台地状の平地は、その後の河川の開析によって形成された上位・下位砂礫段丘面である。堆積物は砂・礫・泥・泥炭によって構成される郡山層が中心であり、中通り低地帯の中心部に沿うように南北に広く分布している。なお、郡山層の周辺には西内層。大槻層が小規模に分布している。矢吹町の市街地および住居域のほとんどが、これらの段丘状の平地、とりわけ上位段丘面上に位置している。平地に入り込んだ浅い谷は、比較的新しい時代に表面の一部が浸食されてきたものである。現河川周辺の低地は、下位段丘堆積物および氾濫原堆積物である砂礫によって占められ、主に水田となっている。

なお、上記の第四期形成の地質の他に、第三紀地殻変動によって造りだされたものとして、阿武隈川以東の丘陵地に、棚倉破砕帯を形成する花崗岩質岩石・変成岩類がみられるが、町域の表層には分布しない。矢吹町一帯の表層の土壌は、那須火山帯を起源とする火山灰の風化土壌（白川ローム層）である。さらにこれを覆う形で、平地、低地には腐植土壌である黒ボク土や、河川の氾濫によって形成される灰色低地土が分布し、丘陵には褐色の森林土壌が分布している。

周辺の植生については、ほとんどが植栽によるものであるが、当遺跡の西方にある諏訪山保険保安林には、樹齢200年ほどのコナラ・シデを主とする森林群落が残されており、自然林に近い状態を保っていると考えられる。

歴史的環境

矢吹町とその周辺地域は、古くより遺跡の集中する地域として知られ、発掘調査も行われてきた。特に阿武隈川と泉川流域に遺跡の報告例が多い。以下、周辺地域の代表的な遺跡を概観する。

調査周辺の旧石器時代の遺跡としては、鏡石町と矢吹町の町境にある陣ヶ岡遺跡が著名で、成田形刃器と呼ばれる硬質頁岩製の石器が採取されている。また、東村上野出島遺跡から前・中期旧石器とみられる石器が採取され、谷地前C遺跡からは100点を超える旧石器が出土している。石川町背戸B遺跡でもナイフ形石器をはじめとする良好な資料が出土している。矢吹町内での旧石器の調査例は赤沢B遺跡から石刃技法による縦長剥片を素材としたナイフ形石器が出土している。また、本遺跡に最も近い上宮崎B遺跡からも旧石器の可能性が高い石器が1点出土している。

縄文時代草創期の遺跡は、矢吹町内での報告例はない。周辺では白河市高山遺跡で隆線文土器が出土し、石川町達中久保遺跡で爪形文、押圧縄文の土器が出土している。縄文時代早期では、矢吹町乙江沢遺跡、長沼町宮ノ前遺跡で少量ながらも井草式・稲荷台式土器が出土している。縄文時代早期中葉の土器は天栄村前原A遺跡・矢吹町下荒貝C遺跡で出土している。特に泉崎村の滝原前山C遺跡からは、関東圏と文化的つながりがうかがえる田戸下層式土器が出土している。

早期末葉から前期にかけては、石川町上森屋段遺跡・矢吹町上宮崎B遺跡・小又遺跡で調査例が

あり、特に小又遺跡では前期初頭の住居跡から土製装身具が出土している。他には、断片的な土器の出土ではあるが、前期初頭の泉崎村滝原前山B遺跡、前期前半期の矢吹町赤沢山遺跡、前期後葉の五斗峙遺跡などが上げられる。なお、天栄村桑名邸遺跡からは、前期初頭から後半にかけてのまとまった遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期では、加曾利E式土器が出土する矢吹町柏山遺跡、大木7b～8b式土器の出土した向原遺跡などがあり、さらに中期の大規模遺跡が調査された前述の桑名邸遺跡が挙げられる。なお、泉崎村滝原山B遺跡では、この時期に後続する土器が出土している。

縄文時代中期から後期にかけての大規模な集落跡としては、白河市大信町屋遺跡があり、多数の遺構、遺物が報告されている。矢吹町では、柏山遺跡・赤沢遺跡が後期の遺跡として知られており、晩期の遺跡には、芹沢遺跡があり、天栄村界谷地遺跡では大洞C2式期の住居跡が調査されている。

弥生時代の遺跡は、石川町烏内遺跡、泉崎村の踏瀬大山遺跡、白河市天王山遺跡が特に著名である。矢吹町内でも平林遺跡、赤沢山遺跡、赤淵遺跡などが弥生時代の遺跡として知られている。

前期古墳時代の古墳については、矢吹町での発見例はないが、須賀川市イカズチ古墳など、周辺地域には数基の古墳が存在する。ただし、矢吹町太兵久保遺跡が4世紀後半頃の集落であることが推測されている。古墳時代中期については、泉崎村原山1号墳が大型の前方後円墳で周溝内より多数の形象埴輪が出土している。矢吹町では塚原古墳・上宮崎B遺跡あり、大久保遺跡、下荒具B遺跡、前谷中遺跡、白山A・C遺跡などの5世紀の集落跡が存在する。古墳時代後期・終末期になると、矢吹町にも多くの古墳群が築造される。主に神田・三城目地区では、阿武隈川沿いの段丘面に分布しており、鬼穴古墳群、谷中古墳群が代表的な古墳である。横穴墓には、久当山横穴群、七軒横穴墓群などの他、泉崎村泉崎横穴が装飾壁画を有する横穴墓として著名であり、当時の集落としては、矢吹町行馬遺跡・三峰森遺跡などが6～7世紀に比定されている。また、東村の矢武川流域は、佐平林遺跡をはじめとして、古墳時代中期から後期にかけての各遺跡が存在し、県南地方の土器研究の指標となった土器編年が設定されている。

奈良・平安時代では、隣接する泉崎村の関和久上町遺跡が白河郡衙およびそれに関連する遺跡として著名である。また、当地域にも関和久遺跡への瓦の供給源とされるかに沢瓦窯跡があるほか、寺山遺跡、下荒具B遺跡などの生産遺跡が松倉・中畑地区周辺に多く存在し、郡衙との関連をうかがうことができる。一方、集落跡は、須賀川市沼平遺跡・沼平東遺跡、玉川村辰巳城遺跡・宗教色の濃い建物跡が確認された江平遺跡・栗木内遺跡・堂平D・F・G遺跡、石川町上悪戸遺跡・下悪戸遺跡、東村佐平林遺跡・谷地前C遺跡など調査例が増加した、この時期の県中・県南地方の阿武隈川流域の地域的な様相も解明されつつある。特に上宮崎C遺跡と同様な単独もしくは少数の住居跡で構成される集落跡が確認された玉川村の堂平D・F・G遺跡では律令崩壊集落の拡散の一例を示すものと考えられる。また、玉川村江平遺跡では、『続日本紀』天平十五年の項の内容と一致する「こんこうみょうきうさいしやうむりききり金光明最勝王教」を読経し終えた内容の記述がある木簡が出土しており、陸奥国の一部で中央政権のもと仏教行事が行われたことを示す発見がなされている。

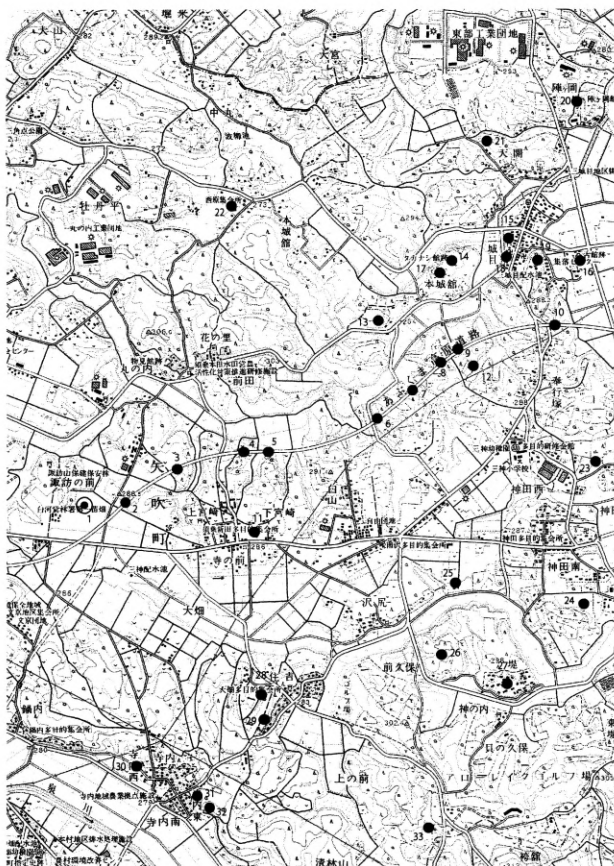


図4 周辺の道路

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	上宮崎 C 遺跡	矢吹町諏訪の前	奈良時代の集落跡 本報告
2	上宮崎 A 遺跡	矢吹町上宮崎	奈良・平安時代の集落跡 平成9年度発掘調査
3	上宮崎 B 遺跡	矢吹町上宮崎	旧石器～近世、古墳群
4	小又遺跡	矢吹町上宮崎	縄文・奈良・平安時代・近世集落跡 平成9年度発掘調査
5	下宮崎 A 遺跡	矢吹町下宮崎	縄文・奈良時代～近世の集落跡 平成9年度発掘調査
6	白山 A 遺跡	矢吹町白山	縄文・古墳・平安時代の集落跡 平成9年度発掘調査
7	白山 D 遺跡	矢吹町白山	古墳～平安時代の集落跡 平成9年度発掘調査
8	白山 C 遺跡	矢吹町白山	古墳～平安時代の集落跡 平成9年度発掘調査
9	白山 E 遺跡	矢吹町白山	縄文・古墳・平安時代の集落跡 平成9年度発掘調査
10	和田館遺跡	矢吹町白山	縄文～平安時代の遺物散布地
11	弘法山古墳群	矢吹町奉行塚	古墳
12	甘露寺跡	矢吹町下宮崎	寺社跡
13	本城館遺跡	矢吹町本城館	奈良・平安時代の遺物散布地
14	タカナシ館跡	矢吹町本城館	中世の城館跡
15	郷藏地館跡	矢吹町三城目字三城目	中世の城館跡
16	古館館跡	矢吹町東川原	中世の城館跡
17	三城目供養塔部	矢吹町本城館	中世の石造物
18	景政寺供養塔部	矢吹町三城目	中世の石造物
19	行屋供養塔	矢吹町三城目	平安時代の石造物
20	陣ヶ岡 B 遺跡	矢吹町陣ヶ岡	縄文～平安時代の遺物散布地
21	陣ヶ岡館跡	矢吹町陣ヶ岡	中世の城館跡
22	天間遺跡	矢吹町天間	奈良・平安時代の遺物散布地
23	佐久間館跡	矢吹町三城目字牡丹平	中世の城館跡
24	吉作遺跡	矢吹町奉行塚	奈良・平安時代の遺物散布地
25	太兵久保遺跡	矢吹町堤	奈良・平安時代の遺物散布地
26	城楽遺跡	矢吹町神田南	奈良・平安時代の遺物散布地
27	岡の内遺跡	矢吹町神田南	奈良・平安時代の遺物散布地
28	沢尻館跡	矢吹町堤字堤	中世の城館跡
29	光明山三宝寺跡	矢吹町堤	中・近世の寺社跡
30	大畑供養塔	矢吹町大畑	中世の石造物
31	法楽院跡	矢吹町佳吉	近世の寺社跡
32	法界山来迎院阿弥陀寺跡	矢吹町寺内	寺社跡
33	寺内館跡	矢吹町中畑字寺内	中世の城館跡
34	西袴館跡	矢吹町大畑字前久保	中世の城館跡
35	和田館跡	矢吹町白山	中世の城館跡
36	堤館跡	矢吹町堤字東堤	中世の城館跡

中世については、城館跡が中心で、陣ヶ岡館跡、タカナシ館跡が著名である。しかしながら、表面での確認が多く、発掘調査が行われたものはなく、詳細は不明である。当地は、結城氏、石川氏、二階堂氏などの領有を受け、いくつかの関連する城館跡の存在が知られている。特に鎌倉時代の遺構と舶来青磁碗が下宮崎A遺跡から出土しており、この他に、供養塔などの石造物、寺社跡や鎌倉期から南北朝期にかけての板碑が多く存在する。その後、蒲生氏、上杉氏の所領を経て、近世を迎える。

近世期は白河藩領となり、丹羽氏、榊原氏、本多氏、松平氏、阿部氏などの所領となり。なお、奥州街道と会津道との分岐点で、矢吹宿として栄えた歴史を持つ。

第2章 遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基である。これらの遺構は、調査区の南西部に重複して存在する。遺物は、攪乱内から不明土器1点出土しているが、遺構外からは皆無である。

第1節 基本土層（図5、写真1・2）

調査区は、元宮林署管轄の種苗圃であったことから、広範囲に耕作されており、土壌も一様に均一的な様相である。なお、当地区の130,000㎡の範囲で実施された試掘調査において観察された土壌は、削平盛り土により造成された谷部以外はほぼ同じ堆積状況を呈しており、阿武隈南道路に接する本調査区を含む遺跡南側部分が特に肥沃な土壌を呈している。調査では、南北壁の二面に土層観察面を設定し、それぞれの土層の堆積状況を観察した。その結果、本調査区では、基本土層として下記のように分層された。

- L I 草木の根を多く含む表土であり、調査区全域に分布する黒褐色を呈する土壌である。締まりがなく、層厚は20～50cmを測り、ほぼ均一に堆積している。
- L II 各壁面に部分的に確認できる暗褐色を呈する土壌であり、締まりがある。層の上部が耕作のため剥かれ、ほぼ水平に堆積する。特に窪地には厚く堆積している土壌であることをふまえ旧表土と判断した土壌である。
- L III 調査区全域に分布する黄褐色の土壌を呈する。粘性・締まりのみられるL IVへの漸移層で層厚は10～20cmを測る。本調査区での遺構検出面は本層上面である。
- L IV 各壁および調査区内で掘り込んだ倒木痕の堀込み時に確認できた明黄褐色を呈する土壌で、調査区全域に分布する。本遺跡の基盤層である。粘性・締まりとも強く、浸透性が低い。

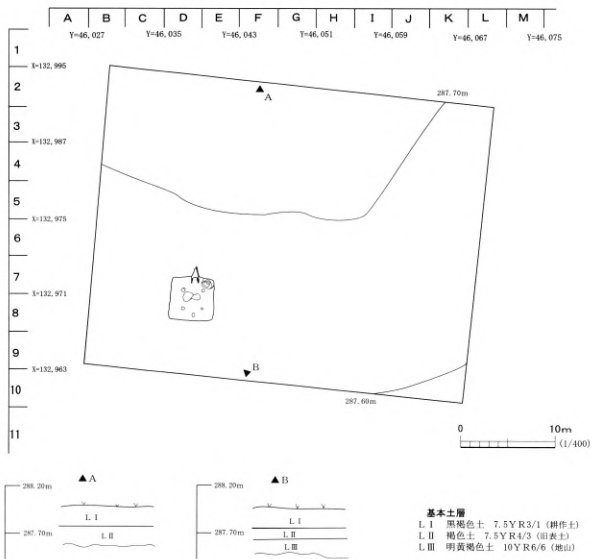


図5 遺構配置図、基本土層

第2節 竪穴住居跡

今回の調査で1,200㎡を調査した結果、竪穴住居跡1軒、土坑1基を検出した。試掘調査時点で炭化物粒や焼土塊が多量に確認できたことから焼失家屋であることが予想された。土坑については、竪穴住居跡の精査中に確認された経緯があり、試掘調査時には存在が確認されなかった遺構である。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図6・7、写真3～6)

本遺構は調査区南西側のC・D・E 7・8グリッドに位置する。遺構検出面はⅢ層で、検出時において壁際および遺構検出面で多量の炭化物粒および焼土塊を確認した。重複関係は、1号土坑よりも新しい。本住居跡の遺存状況は良好であり、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は南北軸で4.7 m、東西軸で4.6 m、最も残りのよい床面までの深さは20cmを測る。各辺の midpoint を結んだ主軸方位はN-4°-Eを示す。

遺構内堆積土は7層からなる。ℓ1～ℓ4は黒褐色系の土色を呈する土壌である。全体的に炭化物粒や焼土粒を多く混入するが、レンズ状の堆積や壁際の特徴的な堆積を呈することから自然流入土と判断した。ℓ5は西壁のほぼ中央部に幅1.3 mの範囲で認められるにぶい赤褐色土であり、この土壌は他の土壌とは異質で焼土の固まりである。ℓ6は壁溝内に堆積する土壌で、褐色を呈している。ℓ7は黄褐色土と褐色土の混土からなる貼床充填土である。この貼床は床面のカマドの位置する北壁側を除く三面に施されている。床面中央部よりは幾分締まりは弱い状況である。

床面はほぼ水平である。壁際に近い部分は貼床の充填土のためか比較的踏み締まりが弱い、その他のⅢ層を床面として使用しており、全体的に踏み締まっている。なかでも中央部の鍛冶炉と考えられる周囲が最も踏み締まりが強い。なお、床面からは、火災に起因する柱状や板状の炭化材が焼土と共に出土した。炭化材は床面のほぼ全域に認められ、各壁から中央部に向かう様相を呈しているものの中には、やや大型の板状炭化材も存在することから、屋根の部材に使用された他に壁材として使用されたものであると推察される。焼土および炭化物粒を多量に混入する土は炭化材を覆うように堆積しているが、消化のために投入された土か、あるいは屋根に上がっていた土が焼土と化した可能性が考えられる。この炭化材および焼土塊はℓ2とℓ5内に多く含まれる。

周壁は各壁とも75°前後と急な立ち上がりとなる。各壁の遺存高は北壁で22cm、南壁で16cm、西壁で24cm、東壁で26cmをそれぞれ測る。

床面からはピット9基とカマド・炉跡を検出した。ピットのうち、床面で検出したものが7基、床下および貼床下で検出したものが2基となる。

カマドは住居の北壁中央部に位置している。遺存状態は比較的良好で、検出時点で燃焼部に土器片が確認された。規模は全長2.8 m、両袖の全幅は90cm、焚口幅70cmを測る。燃焼部は奥行き90cm、

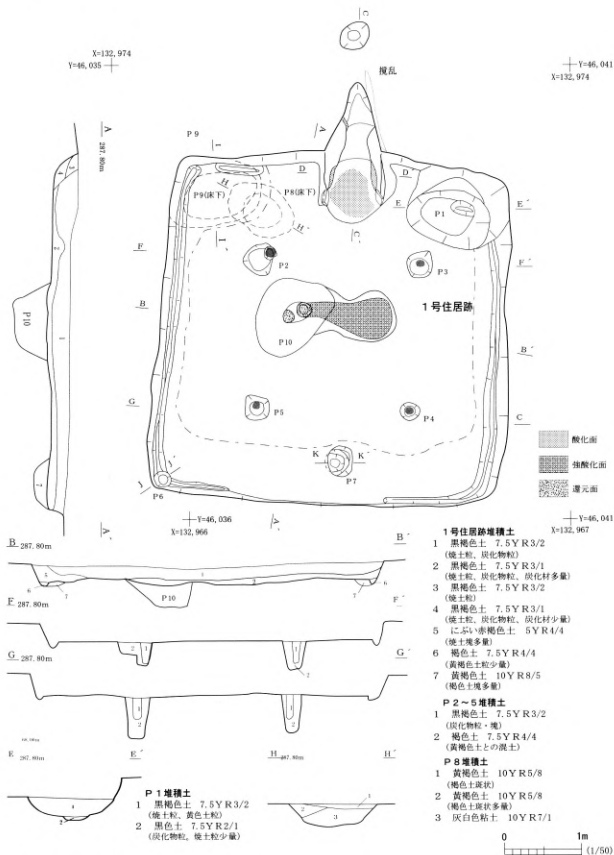


図6 1号住居跡(1)

幅 50cmを測り、床面の高さから 4 cmほど窪んでいる。燃焼部内面の底面と両袖側は強く焼け、焼土部底面で最大 6 cm、袖部で 10cmほどに及んでいる。燃焼部奥壁は約 30°の緩やかな傾斜を有している。袖の長さは左右袖で共に 70cmを測り、袖の床面からの高さは両袖とも約 30cmの残存である。煙道部は全長 1 m、幅 30cm、検出面からの深さが最大で 10cmを測り、その延長部には煙出しピットが位置している。煙出しピットと煙道との間は連続しないが、これは後世の削平により消滅した部分と考えている。煙出しピットはほぼ円形を呈し、径 30cm、深さ 46cmを測る。

カマド内堆積土は 5 層からなる。ℓ 1・ℓ 2 は炭化物粒および焼土粒・塊、土器片を多く含み、いずれも流れ込みによる自然堆積土壌である路判断した。ℓ 3 はカマド天井を構築した際の土壌で、被熱により硬化した焼土ブロックを混入する。その状況からカマド天井の崩落土と考えられる。ℓ 4 は前述の硬化焼土ブロックの下層に位置し上層とは違い幾分締まりが強いことからカマド天井の崩落前に流入した土壌と考えている。煙出しピット内の堆積土は 2 層からなり、いずれも、暗褐色土を斑状に混入する灰白色の粘土である。

ピットのうち、P 1 は住居の北東隅、カマドの右袖近くに位置する貯蔵穴となる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 117cm、短軸 100cm、床面からの深さ 28cmを測る。堆積土は 2 層から成り、住居跡全体を覆っていた堆積土と色調が同じであることとその性状から自然流入土と判断した。

P 2～P 7 は小穴状のピットで、その在り方から柱穴と判断している。P 2～P 4 の 4 基は主柱穴で P 2・P 4 は円形基調の長径 24～40cmの掘形を持ち、P 3・P 5 は方形基調の掘形を持ち、内部に柱痕を有するものである。柱痕の径は 10cm～14cmを測る。掘形の断面形は深さ 32～54cm、底径 18cm前後の逆台形を呈している。また、主柱穴間の距離は 2 mの等間隔となっており、計画性の高さが窺われる。南西隅の P 6 は本住居内で確認された唯一の壁柱穴で、長径 20cm、床面からの深さ 40cmを測る。なお、本柱穴の上部には径 6 cm程の炭化材が立った状態で確認されている。南壁側中央の P 7 は黒色土が堆積する性格不明の小穴で長径 40cm、深さ 20cmを測る。

P 8 は北西隅からやや内側に位置するピットで、埋め戻しにより床面を再構築してあることから床下ピットとした。平面形は楕円形を呈し、長軸 96cm、短軸 60cm、床面からの深さ 24cmを測る。遺構内堆積土は 3 層からなる。堆積土のほとんどは灰白色粘土が占め、上層の 2 層が床面構築の際の充填土である。ℓ 3 の灰白色粘土は後述するが、鍛冶炉の構築材の可能性が高い。

P 9 は北西隅に位置するピットで、本住居の構築時掘形の一部として掘り込まれ、床面構築時に貼床土が充填され埋め戻されていることから、貼床下ピットとした。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 1.3 m、短軸 94cm、深さ 24cmを測る。堆積土は貼床土とした ℓ 7 である。

炉跡を含む鍛冶関連の遺構は床面の中央部に位置し、全体が僅かに窪む瓢箪形を呈する。窪みの全体規模は、長軸 1.82 m、短軸 60～1 m、深さ 2～4 cmを測る。窪み内部には、鍛冶炉跡と推察される被熱還元による緑灰色に硬化する部分が 2 カ所と床面の焼土化が著しい部分が確認できる。なお、鍛冶炉跡の直下の掘形を P 10 とした。規模は、長軸 1.12 m、短軸 90cm、深さ 32cmを測る。堆積土は黄褐色土に褐色土を斑状に混入する 1 層から成る。被熱還元部分には壁の痕跡は

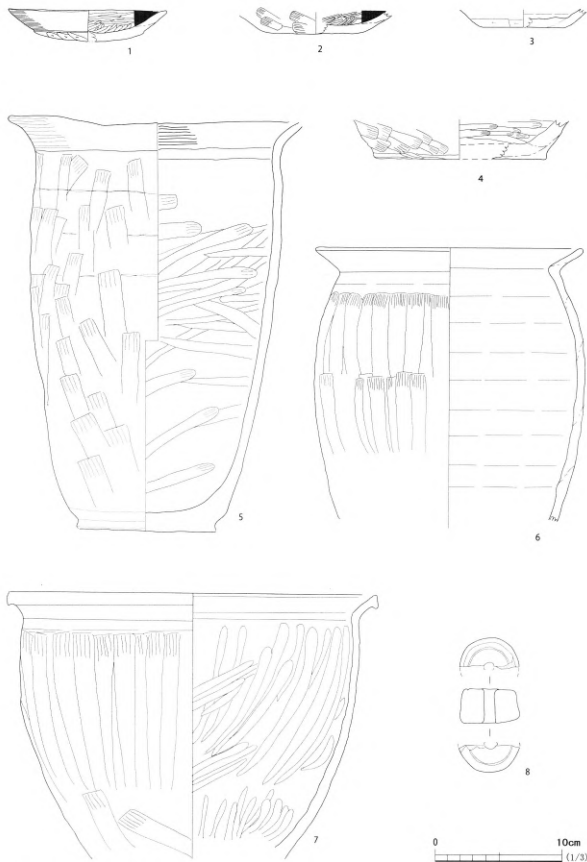


図8 1号住居跡出土遺物

認められず二基同時の操業は考えにくいことから新旧関係は不明である。還元部の規模は、いずれも径19cm前後を測る。床面の焼土化した部位は3cmほど下層に及んでいる。なお、鍛造剥片等の鍛冶関連の遺物は肉眼観察では確認できなかった。

遺物(図8、写真8)

遺物は、住居跡内堆積土およびカマド・P1の堆積土より土出土している。成形にロクロ使用の物としないもの2者の土師器が混在する。図化にあたっては細片の物が多くを占めているために、復元可能な物を中心に図示した。なお、図示はしていないが、特徴的な遺物と判断した物は写真図版に掲載している。

1は非ロクロの有段平底の土師器杯であり、推定値は口径12.5cm、器高2.5cmを計る。比較的小型であり口縁部下に軽い段を有している。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけては手持ちケズリが認められる。内面には、ミガキの後、黒色処理が施されている。2は床面出土の非ロクロの土師器杯であり、推定値は底径7.8cm、残存高1.5cmを計る。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけてはナデが認められる。内面にはミガキの後、黒色処理が施されている。3はロクロ成形の小型甕の底部破片である。推定値は底径6.5cm、残存高は1.4cmである。体部から底部には回転ヘラケズリが認められる。4非ロクロ成形の土師器甕の底部である。推定値で底径13.5cm、器高3.1である。体部内外面にはナデが認められ、底部には木葉痕が認められる。5は非ロクロ成形の長胴甕であり、口径23cm、器高32.6cm、底径10.8cmを計る。口縁部にはヨコナデ、体部には輪積み痕が明瞭に認められ、その輪積み痕を消すようにナデが認められる。内面には、ナデが施されている。6はロクロ成形の甕であり、口縁部が強く屈曲する。体部には縦位のナデが認められ、内面はロクロナデが認められる。推定値は口径20.9cm、器高22.1cmを計る。

7はカマド出土のロクロ成形の土師器鉢であり、口径28.8cm、器高21cmを計る。やや大型を呈し、口縁部が「く」の字状に外反し、端部で僅かに立ち上がる。体部外面の調整は、ロクロナデの痕跡を消すように丁寧な縦位のナデが施され、内面にはミガキが施されている。ただし、外面体部下端には僅かに化粧土の痕跡と炭化物の付着が認められことから、二次的被熱を受け内面の黒色処理が消滅してしまった可能性がある。8は滑石製の紡錘車である。径は約5cm、厚さ2.8cm、孔径0.8cmを計る。写7-9は、 ℓ 2から割れた状態で出土した溶結凝灰岩製の砥石である。割れ口かの状況から本来は平面的な石であったと推測される。表面から内部のほぼ中央まで熱変による変色が見られることから、金床として利用された後、砥石として再利用されたものと考えられる。

まとめ

本住居跡は一辺約5mの比較的大型の住居に相当し、住居内の施設を含め全体的に丁寧な作りの印象を受ける。また、焼失家屋であるため上屋構造を想定できる良好な遺構である。

住居の床面には柱穴やカマドなどとともに、貯蔵穴や鍛冶炉跡などが確認され、特に床面中央に位置する鍛冶炉跡は、単独で所在する本住居跡の性格を示唆するものと考えている。

本住居跡の機能時期は、出土遺物の特徴から8世紀末～9世紀初頭頃と考えている。

第3節 土 坑

1号土坑 SK 01 (図9, 写真7)

本土坑は調査区南西側のE 8グリッドに位置し、遺構検出面はLⅢ層である。1号住居跡と重複関係を有し、本遺構が古い。

遺構内堆積土は3層から成り、焼土粒および炭化物粒を混入する褐色系の土壌である。遺存する部位が極めて少ないが、断面状況から自然堆積と判断した。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈していたものと推察される。規模は長軸 1.26 m, 短軸 30cm, 検出面からの深さ 36cmを測る。底面の形状は把握できず、遺存壁は急な立ち上がり呈している。本遺構から遺物は出土しなかった。ゆえにその所属時期と遺構の性格については不明である。

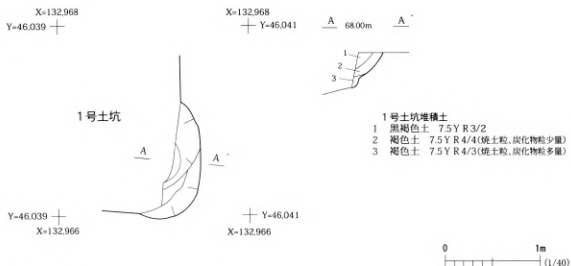


図9 1号土坑

第3章 ま と め

上宮崎C遺跡は、通称矢吹が原と呼ばれる平坦面に立地し、平安時代前期の頃に機能したと考えられる1軒の竪穴住居跡で構成される点に特徴がある。この竪穴住居跡の機能した時期は、本遺跡から東へ約400mに立地する上宮崎A遺跡の時期に重なるところがあり、当遺跡との関係が窺われる。

出土した遺物は、土師器が主で須恵器は極めて少ない。なお、本住居跡の時期を捉えることが出来る遺物は、床面出土の丸底風平底の土師器杯片とカマド内出土の土師器甕である。出土遺物の全体的な特徴を、最も近接する上宮崎A遺跡出土遺物との比較すると宮崎A遺跡のⅡ期の時期相当すると考えられる。従って、本住居跡の機能した時期は8世紀末から9世紀初頭と考えている。

次に、今回検出された竪穴住居跡の特徴を以下に記し、遺構の在り方を検討してみたい。

検出された竪穴住居跡の平面形は、端正な作りの印象を持つものである。結果的には、焼失により機能を終えたものであり、住居跡の中央から放射状に分布する炭化材の在り方から上屋構造が窺うことができる。出土した炭化材の中には、板状のものが数点含まれており、棒状の炭化物の下位に位置していることから、天井部材に使用されたものと推察される。

住居跡内の施設としては、カマド・貯蔵穴の他に4本の主柱穴の中央に火熱により赤褐色変色した部位を確認した。形状的なものから鍛冶炉跡と報告したが、鍛冶作業に伴う遺物は皆無である。

鍛冶炉に至っても僅かに青灰色を呈する円形の硬化面を確認したことによって判断したものであり、炉壁片の出土もない状態である。いずれにせよ住居跡内で認められる火熱による赤褐色酸化部分は、硬化範囲と表層から下位の部分におよぶ被熱痕跡から、長時間もしくは長期間使用されたものであることが窺われるが、廃絶にあたっては、その痕跡を消すような行為があったと推察される。

遺構内出土遺物は、覆土内からは数点であり、床面出土の遺物に至っては、カマド周辺に僅かに小破片が確認できる程度である。遺構の時期を判断する遺物は、すべてカマド内より出土した土師器片である。カマド内に意図的に土師器甕を入れたことも窺われる。

以上の状況から本竪穴住居跡は、内部を清める行為があったことが推察され、住居として役目を終えた後、廃絶家屋として放火処分された可能性が高いと考えている。

次に、本住居跡が近接する上宮崎A遺跡などの大規模集落より離れた場所に単独で所在する状況を考えてみたい。ただし、本来考古学で捉えることが出来る範疇から離れ、立証困難な事象ではあることから可能性についての検討に止めたい。

従来、単独で所在する遺跡は、「離れ国分」(中山吉秀 1976) もしくは「小規模遺跡」(橋口定志 1985) と称される遺跡である。福島県内のこれらの大まかな分析は「平ヶ谷地A遺跡」(井 1989 年) の調査例から報告がなされており、単独で所在する住居跡の捉え方をまとめている。所

謂「離れ国分考」の論考に基づく考えについて異論はなく、可能性の補足として当遺跡の在り方を検討する。

単独所在の住居跡の定義として、水田・畑作経営に関するものと生産活動や商業活動に関わるもので、農業民と非農業民に大別した見方が一般的である。この観点から当遺跡の在り方は当地区が営林署の種苗圃として使用されていた経緯もあるが、試掘調査の結果からも畑地として使用されていた痕跡は見いだせない、まして、丘陵上に位置していることから水田であった可能性はない。また、同様の内容で樹林帯であった根拠も提示できないが、周囲には植林された針葉樹の他に落葉広葉樹の林が存在することから、当時の景観を予想するならば原野と雑木林の混在した土地であったことが予想される。このことから畑地もしくは水田の季節的な作業小屋・見張り小屋の性格を有していたものとは考えにくい。また、検出された竪穴住居跡はカマドを構築し長期に生活できる環境を整えている様相が窺える。生産活動を生業としていたかは、鍛冶炉跡の存在から可能性も高いが、製品を含め鍛造剥片や鉄滓などの鉄製品の生産活動に伴う特有の遺物の出土が皆無であることから、積極的な判断材料に成りにくい。

以上の状況を検討すると積極的に判断される事象はないが、ここで、隣接する上宮崎A遺跡との関係に注目したい、上宮崎A遺跡の出現は、官符による開墾政策を背景とした開墾奨励の時期を経て、奈良時代後半の開墾の廃止や禁令が達せられた時期と重なる。当初、上宮崎A遺跡の出現に強く関わりを持ち、先行して集落域の整備等に当たった人々の居住と推察していたが、集落規模と出土遺物を考慮すると上宮崎A遺跡の報告の中で集落の出現が、「当時、白河地方の有力層が推進した開墾集落であり、掘立柱建物跡を含む大型竪穴住居跡群により構成された遺構群がその様相を物語っている」（安田：1998）と述べている上宮崎A遺跡のⅡ期に相当することから、当遺構の性格は村落内に寺院を建立するにあたり、寺院建立の際の建築部材の切り出し作業に従事した人々の居住域であった可能性を考えたい。巨視的に見れば、一般集落内での作業集団の移動および作業拠点となる要素を含んだものと推察される。

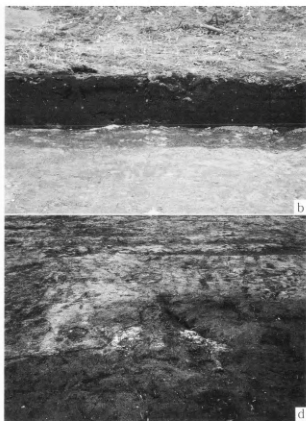
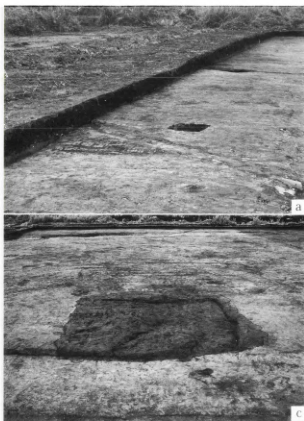
引用・参考文献

- 高橋・井 1989 「平ヶ谷地A遺跡」『福島空港関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』福島県文化財報告書第212集
- 安田 稔他 1998 「上宮崎A遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査』福島県文化財報告書第352集
福島県教育委員会 1996 『福島県遺跡地図』中通り地方
- 小林清治 1980 「平安期の矢吹」「鎌倉期の矢吹」『矢吹町史』
- 能登 健
- 洞口正史 1975 「山棲み集落の出現とその背景 ― 二つの「ヤマ」に関する考古学的分析」
『信濃』第37巻4号 信濃史学会
- 小島敦子
- 中山吉秀他 1976 「離れ国分考」『古代61』早稲田大学考古学会
- 橋口定志 1985 「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化44』物質文化研究

写真図版

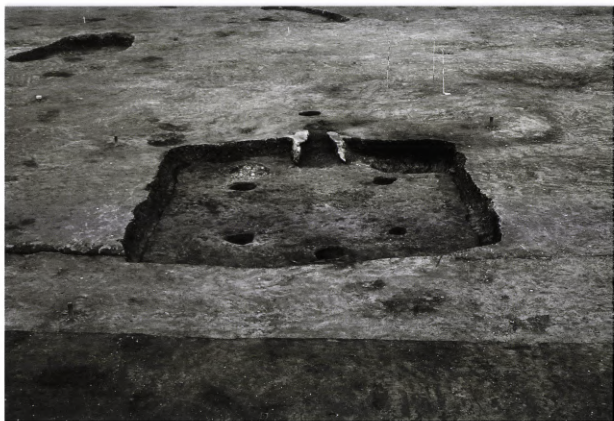


1 調査区全景（南西から）

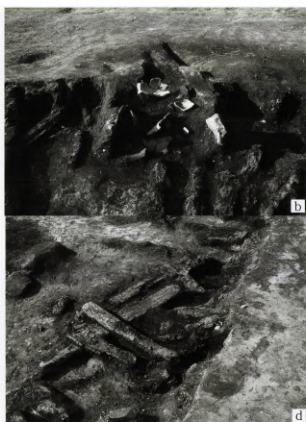
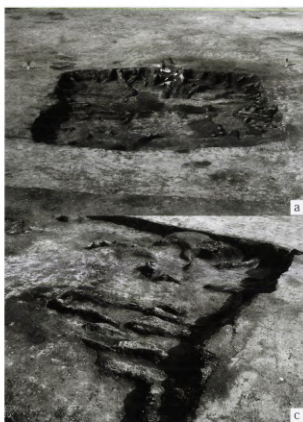


2 基本層位、遺構検出

a 北壁基本層位 b 南壁基本層位
c 壁穴住居跡検出 d カマ下部分検出



3 1号住居跡全景（南から）



4 1号住居跡炭化材検出状況

- a 炭化材検出状況（南から） b カマド内遺物出土状況（南から）
 c 西壁際炭化材出土状況（北西から） d 東壁際炭化材出土状況（南から）



a



b



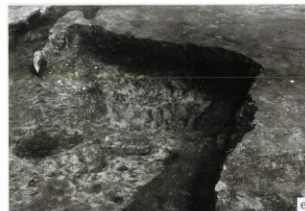
c



d

5 1号住居跡細部(1)

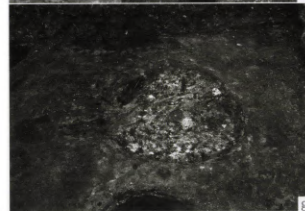
a カマド断面CC'断面(南西から) b カマド断面DD'(南から)
c カマド完掘状況(南から) d 住居跡断面BB'(南から)



e



f



g



h

6 1号住居跡細部(2)

a P1全景(南東から) b 床面酸化部掘出(南から)
c P8全景(南から) d 住居跡南西隅柱穴(北から)



7 1号土坑

a 1号土坑断面(南から) b 1号土坑完掘全景(南から)



8 1号住居跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみやざき しー いせき							
書名	上宮崎C遺跡							
シリーズ名								
シリーズ番号	第 集							
編著者名	佐々木慎一							
編集機関								
発行機関	矢吹町教育委員会 〒969-0236 福島県西白河郡矢吹町一本木100番地11 TEL 0248-42-2869							
発行年月日	2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
上宮崎C	福島県矢吹町 諏訪の前	466	00136	37° 11' 53"	140° 21' 7"	20080825	1,200㎡	工場建設
						～		
						20080912		
所収遺跡名	種類	主な時代	主 な 遺 構		主な遺物	特 記 事 項		
上宮崎C	集落跡	平安時代	竪穴住居跡	1軒	土師器	丘陵平坦部に単独で所在する平安時代の住居跡と土坑を確認した。		
			土 坑	1基				

矢吹町文化財調査報告書第 13 集

上宮崎 C 遺跡発掘調査報告書

平成 21 年 3 月 31 日発行

発 行 矢 吹 町 教 育 委 員 会

〒 969-0236 福島県西白河郡矢吹町一本木 100 番地 11

印 刷 矢 吹 タ イ ム ス 印 刷

〒 969-0272 福島県西白河郡矢吹町曙町 305 番地
TEL 0248-42-2222